



エッセイ

移動しながらことばを学ぶ

上田 潤子*

© 2015. 「移動する子どもたち」研究会. <http://gsjal.jp/childforum/>

1. 「移動する子ども」になって

はなのかみ方

ロンドン補習授業校

小三 上田 潤子

わたしは、ウッドリッジ・スクールと言う学校に行っています。そこにミセス・ロビンソンと言う先生がいます。その先生はわりと年とっています。かみは、みじかく黄色です。そしてはなをかむときに、ミセス・ロビンソンは、すごく大きな音をたててプーンとかみます。みんながびっくりしてとび上がるぐらいです。わたしもはじめて会ったときびっくりしました。それもハンカチでかむのです。いつも赤いハンカチをもって来ます。かんだ後は、ブラウスのそでの中へ入れてしまいます。あとからほかの先生たちもハンカチで大きな音を出して、はなをかむことが分かりました。そしてみんなイギリスは、そういうふうにはなをかむことも分かりました。わたしは、ふしぎだなと思いました。わたしがティッシュではなをかんでいたらミセス・ロビンソンに「ポケットに入れてもう一回つかいなさい。」と言われました。それでポケットの中にしょうがなく入れました。そしてミセス・ロビンソンが見ていない時にごみばこにすてました。後からはなを新しいティッシュでかんでいるのを見て「さっきのティッシュは。」とききました。わたしは、こまってしまいました。イギリス人はもったいながら屋だと思いました。

* 早稲田大学日本語教育研究センター

日本人はティシューでしずかにはなをかみます。ハンカチでかんだりティシューを二回つかったりはしません。わたしは、日本人とイギリス人は、ぜんぜんちがうなと思いました。

『第二回海外子女文芸作品コンクール入選作品集』（1981年12月18日、財団法人海外子女教育振興財団・編集/発行）より

これは、私が小学校三年生のときに書いた作文である。世界中の日本人学校に通う子どもたちを対象にした作文コンクールで佳作に選ばれ、本に載った。移動の多い生活を続けてきたわりには物持ちがよく、いまだに日本語教育の本などとともに本棚に並んでいる。

改めてこれを見てみると、小学校三年生の日本語としては特に問題がないように思う。ただ「ロビンソン先生」ではなく「ミセス・ロビンソン」、一般的には「ティッシュ」と表記するものを「ティシュー」と書いていることなどは英語の転移と言えるかもしれない。

「ミセス」については、母に聞いて書いた覚えがある。実際にはいつも「ミッスイーズ」といった英語の発音で呼んでいて、家で日本語で話すときもそのように言っていたため、いざ日本語で書こうと思うとどうやって書いたらいいかわからなかった。それで母に聞くと、日本語では“Mrs”を「ミセス」と書くのだと教えてくれ、「変なの」と思った。「ロビンソン先生」と言ったら全く別人のような感じがするから、そうはしなかった。

幼稚園を日本で終え、一年生になる直前にロンドンへ行った。イギリスのシステムでは4歳半から学校が始まり、9月から新学期なので、中途半端な時期に転入することになった。当時ロンドンには四年生からしか全日制の日本人学校がなかったので、現地の公立の学校に入った。英語は全くわからなかったが、特に困った覚えはない。周りの大人が言っていることを推測しながら聞いていた覚えはある。でもそれは日本にいても同じだった。そんな年齢だったので、英語は遊びながら自然に覚えた。仲のいい友達が日本語を知りたがって「うち」「おしっこ」「おっばい」などを教えた。当時の私としては最大限に「悪いことば」である。自然習得では真っ先に「悪いことば」を覚えるものである。考えてみれば、あれが私の最初の日本語教育経験だった。

帰国したのは、六年生のお正月、小学校卒業間近である。日本語の問題はなかったが、ラジオ体操がわからない、芸能人を知らない、給食の牛乳がうまく開けられない、など、「常識」がないために戸惑われることが多かった。決していじめられたりはしなかった。むしろ「イギリス帰りのお嬢様」というイメージが勝手に作られ、憧れられた。それは決して気分の悪いことではなかったが、「私が知っているイギリスは、そんなにきらきらした世界ではない。むしろどんよりとして垢抜けなくて古臭い世界。でも懐かしい人々がいる、特別な場所。この心の風景は誰とも共有できない。」という孤独があった。インターネットなどができるずっと前のこと。イギリスの友達に手紙を書き続けた。それが相手に届いて返事が来るまで最低でも2週間。夜、月を見て、「この月が8時間後にはイギリスの空の上に行くんだよなあ。月

にメッセージを託せないかな。」と考えていた。

2. 「移動する子ども」のアイデンティティ

2. 1. 空間的な移動

イギリスにいた頃、よく「チャイニーズ」と言われた。まだ日本食もさほど注目されておらず、ましてクール・ジャパンなどという感覚はなかった70年代後半、「ジャパン」というブランド力は弱かった。「チャイナ」はとりあえず有名で、「ジャパン」はその一部ぐらいに思われていた。「チャイニーズ」と言われると無性に不快だった。「チャイニーズ」をよく知らなかったから、「チャイニーズ」だと思われて嫌がる根拠もない。ただ母が妹の名前や犬の名前で私を呼んだときに感じる違和感と同じなのだろう。違うものは違う、それだけだ。でも、力を込めて抗議した。「チャイニーズじゃない。ジャパニーズだ。」と。相手はたいして違いがわからない。いずれにしろ、東のほうの遠い国だ。

日本に帰ってきて、「イギリス人」と言われたりした。どこでそんな話が作られたのか、「日本人とフランス人のハーフ」と聞きつけて他のクラスから見に来る子もいた。今のように誰でもヨーロッパに旅行に行くような時代ではなかった。大人も含め、みんなに好奇の目で見られた。あれほど「ジャパニーズ」だと主張してきたのに、今度は何人だかわからなくなってしまった。落ち着くところは「何人でも関係ない。私は私。」という開き直りしかない。

「帰国子女だから自己主張が強い。」とよく言われる。「さすが海外育ちで、はっきりしたお嬢さん。」などと保守的なおばさま方は言う。しかし私はイギリスに行く前から、しゃべりすぎるといって親が幼稚園に呼び出されていた。節分の鬼のお面に自分の髪を切って付け、「こういうお子さんは初めて見ました。変わったお子さんですね。」と言われたこともある。イギリスの学校でもいたずらで先生たちを困らせ、よく校長室の前に立たされていた。だから「帰国子女」というカテゴリーにはめて語られるのは的外れだと思っていた。

確かに、外からの視点を持ってしまったために、「普通」と思われていることを批判的に見る子どもになったということはあるだろう。「日本人って…」と、まるで自分がその一員でないかのように語ることが多い。「TCKは多様な文化環境で育つのでどのような文化にも順応し対応できる反面、どの文化にも帰属感がなく、居場所がないように感じる」(川上, 2011, p. 93) というのはまさにその通りである。世界のどこでも生きていける気がするが、日本に落ち着ける気がしない。日本語教師になったのも、この理由からである。いろいろな国に行きたい、という思いだけだった。

イギリスにいたとき、周りの日本人は移動している人たちばかりだった。アメリカやら東南アジアから来て、またヨーロッパのどこかの国に去っていったり、転勤でいつどこに行くことになるかわからない、というのが当たり前だった。うちもイギリスのあとスイスのイタ

リア国境近くの町に転勤が決まり、私はイタリアの全寮制のアメリカン・スクールに入ることになっていた。ところが直前に日本への帰国に変わった。イタリアも楽しみにしていたが、日本も楽しみだった。

日本の書籍は3倍ぐらいの値段で専門店で売られていたが、お小遣いを貯めて漫画を買って、没頭していた。漫画の中の日本は憧れの世界だった。だから今、学生たちが日本の漫画をきっかけに日本語に興味を持つというのがよくわかる。実際に日本に来てみると、漫画と現実とは違うということに少しがっかりするということも、よくわかる。結局現実というのはどこにいてもたいして変わらない。どこに行っても「自分」からは離れられない。

しかし、空間的に同じところに留まっていると息苦しい。どうしても移動したくなってしまふ。「外人」でいるのが心地よい。国家や社会に緩く束縛されているのがよい。日本で日本人でいられる自信がない。日本にいと外国人のような気がしてしまう。日本で外国人でいるより、外国で本物の外国人でいたほうが健全である。外国にいと「日本人」というアイデンティティを持つことができる。

2. 2. 言語間の移動

イギリスにいる間、家では日本語を話していたが、人の名前、場所の名前、商品名などは英語だから、当然名詞の多くは英語になる。カタカナではなく、英語である。それもイギリスの。動詞や形容詞、擬態語・擬音語なども英語が混じっていたかもしれない。日本語の文型に英語の語彙が入るという形だ。誰々が「～」と言った、という引用の部分は文単位で英語だっただろう。

帰国して間もなく中学生になり、英語の授業が始まった。そこで教えられる英語はアメリカ英語で、強い反発を覚えた。「あれは英語じゃなくて米語だ！」と憤慨し、テープに続いて発音させられるときも、イギリスの発音を固持、試験のときもイギリス式の綴りを変えなかった。このようにして私の「イギリス人」性は強まった。しかし環境とは恐ろしいもので、そんな私の英語も徐々にジャパニーズ・イングリッシュに染まっていった。

日本語教師になって24歳で韓国に行ったとき、カナダ人のルームメイトがいた。同い年の女の子で、同じ語学学校で英語を教えていた。すぐに意気投合した。それまで私はアメリカとカナダを同一視していた。イギリス人が日本を中国の一部だと思うように、カナダをアメリカの一部だと思っていた。それがカナダ人にとっていかに屈辱的なことであるかを知った。彼女はアメリカとカナダが本質的にいかに違うかを事あるごとに強調した。カナダ人のその思いはわかったが、アメリカ英語とカナダ英語の区別はいまだにわからない。アメリカ英語も地方によっていろいろであることを知ってはいるが、イギリス英語を基準にすると、北米の英語という大別になろう。私は彼女の影響で、少しずつ北米式の英語を取り入れることにした。もし彼女の人柄に共感しなかったら、そういうことは起きなかつただろう。彼女と話すとき、あえて彼女と全く違う発音で話すのは、反感を示しているような気がした。もとも

と自分の母語でもないのだ。それにどうせだぶジャパニーズ・イングリッシュになってしまっている。自分の話す英語に自分の歩んだ歴史が集約されていればいい。そう思って、意識的に「ウォーター」を「ワラー」、「トマトウ」を「トメイロウ」と言ったりするようになった。今も相手によって少し発音を変える。いずれにしても、自分らしい英語であればいいと思っている。これからは、自分の研究のことを語れるように、アカデミックな語彙を増やしていかなければならない。「アイデンティティ（自分が思うことと他者が思うことによって形成される意識）と平衡する『ことばの力』」（川上，2011，p. 27）のために。

さて、韓国で、はじめは一言も韓国語が話せなかったのも、英語か日本語で話していた。でも、相互に学ぶというのが私の信条であるので、日本語を教えるのと同じぐらい一生懸命韓国語を学んだ。大学でロシア語とサンスクリット語を勉強していたが、いずれもインドヨーロッパ語族である。韓国語があまりにも日本語に似ていて、驚いた。風土や情緒、習慣も、まるで別々に育った双子に出会ったようで、不思議な懐かしさを感じた。それでいて日本より少し近い人間同士の距離、日本より少し濃い感情表現に惹かれ、韓国語に熱中した。

最近になって中国へ行き、中国語を覚えた。韓国語を忘れてしまうのではないかという恐れがいつもあった。そのためか、よく韓国語の夢を見た。昼間は中国語で話しているのに、寝ている間に韓国語が出てくる。忘れないで、と韓国語が言っている気がした。そのうち、夢も中国語で見るようになった。

中国から帰国して半年ぐらひは、中国語がかなり自然に話せていた。しかしその後、中国人の友人に「中国語が下手になったね。」と言われた。確かに、簡単な単語も出てこなくなり、口の筋肉がなくなって滑らかに発音ができなくなった。体の一部が溶けて消えていくような恐ろしさがある。英語も韓国語も中国語も私のアイデンティティに欠かせない要素なのだ。ことばの中に、私を育ててくれた人々の存在がある。

2. 3. 諸々の移動

我が家には勉強ができて当然という暗黙の強制があった。父は東大を出ていて、親戚にも東大卒はたくさんいた。私が東大に入ってもなんの不思議もないという環境だった。でも私は父を人間的に尊敬することが全くできなかった。だから勉強なんかしない、と思った。

また、「大人」と「男」は支配したが、と感じ、極端に警戒した。幼稚園の頃、砂場で「女は立入禁止！」と砂を投げられた。砂が目に入ったが、「女はすぐ泣く」と思われるのが嫌だったから、一生懸命目を開けていた。今もあの場面を思い出すと、憤りが込み上げる。今はだぶ変わったが、私が生まれた70年代は男がとてつもなく大きな顔をしていた。私は体が大きく発言も多かったのも、目障りだったのだろう。「女のくせに」とよく標的にされた。自分が標的にされるのが嫌なのではなく、そのような考えに苛立ちを感じたので、あえて男に対抗して挑発するようなこともした。ピンクが大嫌いな色だった。ピンクは女の子の色、と決められていたからだ。最近では男の人でもピンクを着たり持ったりするようになったので、ピン

クが好きになった。

大人は自分たちの都合のいいように子どもを管理する、とっていたから、大人の言うことは聞かなかった。小学校高学年ぐらいから高校までは、「大人と男は無視する」という主義で生活した。同世代以下の女の子しか範疇に入れないということなので、非常に狭い世界に住んでいたことになる。父のことも完全に無視した。

尼さんになろうかと思ったりもしたが、自分は逃げている、怠けているだけなんじゃないか、と内省し、本気で大学受験に挑むことにした。それまでまともに勉強したことがなかったが、英語と現代文はある程度できた。英単語、古文と漢文の文法、世界史をとにかく暗記して、念願通り、早稲田一文、哲学科に行くことができた。世界を狭めるのはやめ、いろいろな人と話そうとも決心した。父との関係がよくなることはなかったが、その束縛からはだいぶ自由になった。父への反発が哀れみに変わり、情けなさに変わり、父の存在はもはや権威ではなくなった。

権威といえば、日本人の欧米崇拜に反感を持っていた。イギリスで、東洋人を見ると手を合わせて変なお辞儀をしながら「ハイ！」などと言ってくる人たちがいた。私も幼稚園の頃、白人が通ると振り返って見たりしていたから、それは似たようなものかもしれないが、非対称であるのは、日本人が自らを欧米人に劣ると思っているかのようなところである。今はだいぶ変わった。でも私の親の世代は特に欧米崇拜が強く、父などはその典型であった。「ビフテキ」やテレビで見る大きな犬のいる大きなアメリカの家に憧れた世代で、父自身、大学時代に1年間アメリカに留学している。自分が東洋人でありながら、中国人や韓国人を馬鹿にする。私の同世代もアメリカ人の真似をする人が多く、不快であった。

イギリスで、中国人や韓国人は、私の日本人としてのアイデンティティを脅かす存在だった。イギリス人が彼らと私を同一視するからだ。確かに韓国人は、私も見分けがつけられないぐらい似ていた。当時の私にとっては、無断で出回る偽物のような不愉快な存在でしかなかった。でも大学生になった頃から、それは結局、西洋人の視点に支配されていることだと思うようになった。東洋人として、お互いのことをもっとよく知り、協力して、西洋に対抗できるような世界を作らなければいけないと思うようになった。そして、中国と韓国が自分に与えられた課題となった。

3. 日本語教師という仕事に就いて

私は第二次ベビーブームといわれる何事も競争の激しい世代で、しかも大学生になった頃はバブル崩壊直後の就職氷河期といわれた時代であった。でっち上げた書類を片手に、リクルートスーツの人たちの長い行列に並んでいると、めまいがした。自分が何を求めているのか全くわからなかった。そんなとき、偶然、日本語教師という仕事を知った。これなら自分

にできるかも、と直感的に思った。そしてとにかく外国に行きたいと思った。消去法で入った世界だが、ここまで楽しく続けて来られた今となつては、あのときの選択も肯定できる。

日本語教師養成講座を終えて最初に決まった仕事は、韓国の語学学校だった。かつて「国語」として日本語が教えられていた韓国で日本語教師をするにあたり、私は「外国語」として日本語を教えるのだということをはっきり示したいと思った。私はイギリスにいるとき、普通の学校では英語を使いながら、通信教育や補習校で「国語」を勉強していた。それは日本の国民として持つべき知識や情緒を学ぶ科目だと思っていた。イギリス滞在が長くなつても常に日本への帰属意識はあったから、「国語」を学ぶことに違和感は全くなかった。むしろ、英語が話せないと馬鹿だと見做されたり、日本語で話すなどと言われることに反発を感じていた。このような経験があったからだろうか。生徒たちが日本語を学ぶ以上に一生懸命、私は韓国語を学ばなければいけないと思った。彼らが私のことを知ろうとしてくれるなら、私も彼らのことを知りたいと思うのが人として当然である。そして語学の教師であるからには、生徒たちよりも速く深く学んでみせなければいけないと思った。

精神的マッちょである韓国人以上に勉強するのは大変だった。多くの会社員が朝6時半から日本語の授業を受け、出勤していく。退勤後、夜の時間帯に英語や当時人気が出はじめた中国語の授業を受けて帰宅する。しかも韓国の語学学校は、月曜日から金曜日まで毎日通うようになっている。私も昼間に空き時間があるとはいうものの、夜9時半に授業が終わって翌朝6時半に授業が始まる、さらに飲み会も度々あるという生活で、常に寝不足だったが、韓国語の勉強は絶やさなかった。常に辞書を持ち歩き、気になることがあったら所構わず辞書を開いた。寝るときも枕元に辞書を置き、夢に出てきたことばをすぐに引く。夢の中で話している相手が言った単語を「何だっけ?」と思いながら目が覚め、がぼっと起きて辞書を引くとみつかるときもあるし、存在しない単語のときもあった。このような、まさに夢中の生活は楽しかった。しかしこうなると、「韓国人になりたい」と思ってしまうようになる。「母語話者を規範とした第二言語教育に対する批判」というのも教える側としてはもっともだと思ふのであるが、学ぶ側が熱中するにつれ母語話者のようになりたいと思うようになる心理はよくわかる。声の出し方、表情、ジェスチャーはもちろんのこと、私は化粧の仕方も歩き方も韓国人を真似た。その結果、飛行機の中では韓国語で話しかけられるようになった。飲み物を韓国語で注文する。それでも日本人だとはバレていないようだった。ただ、タクシーに乗って行き先を告げるまではいいが、世間話を始めてしばらくすると、大抵「どこから来たの?」と聞かれた。訛りがあるため、韓国の他の地方から来たと思われるのだ。中国の朝鮮族だと思われることも多かった。これは結局最後まで克服できず、どうしたら地元の人のように話せるようになるのだろうか、といつも悩んでいた。

自分に目標を高く持たせて叱咤激励するのは自分だが、韓国語を教えてくれるのは生活で出会うすべての人だった。挨拶さえ知らない状態で韓国に渡ったので、はじめ、職場の語学学校で受付のお姉さんがなぜ会ったときも別れるときも「アンニョンハセヨ」と言うのだろ

うと不思議に思った。韓国語では会ったときの挨拶も別れるときの挨拶も同じなのかと思った。それで直接彼女に聞いてみると、別れるときは「アンニョンヒガセヨ」と言っているのだと教えてくれた。「アンニョンヒ」は「安寧に」で「ガセヨ」は「行ってください」、だから受付の人はそこを去る私に対して「アンニョンヒガセヨ」と言うが、そのままそこにいる受付の人に対して私は「アンニョンヒゲセヨ」と言わなければいけない、「ゲセヨ」は「いてください」という意味だと。そして早速、毎日使うようになった。「アンニョンハセヨ」と聞こえた経験があるから、そんな感じで後半ははっきり言わずに、最後の「ヨ」を伸ばすようにする。教科書で勉強していたら、そうはならなかったかもしれない。文字は同僚の英語教師に教えてもらった。ハンゲルの横にアルファベットを書いてくれたので、夜、家に帰って暗記した。動詞を最初に教えてくれたのは、校長の奥さんである。「行く」「来る」「食べる」「飲む」などの動詞とその活用を私のノートに書いてくれた。このように、ことばと教えてくれた人の顔が結びついている。田中（1981）は「母語」について「乳房からの授乳が無言でおこなわれることは決してない。乳を吸わせる母親と乳を吸う子供とのあいだには、同時にことばを話しかける母親と聞く子供との関係が必ずあった。こどもが全身の力をつくして乳を吸い取ると同時に、かならず耳にし全身にしみとおるものは、またこの母のことばであった。」(p. 28)と言う。私は韓国語を与えてくれる人の顔を、赤ん坊が乳を吸いながら母親の顔を見つめるように、絶対的な信頼をもってみつめていた。だから今も、ことばとともにそれを教えてくれた人の顔が浮かぶ。

韓国に計3年いて、日本でしばらく日本語教師を続けてから、中国へ行った。韓国語を身に付けたのと同じように、生活の中で出会うすべての人から中国語を吸収した。母語話者同士が雑談をしているところへ入っていくのは勇気が要る。私のせいでテンポが崩れ、場が白けてしまうかもしれない。それでも自爆覚悟で輪に入っていった。みんな私を歓迎してくれたが、私の発言が笑いを生むことも多々あった。文法的に間違っていたり単語の使い方が不適切だったりするせいだ。みんな口々に正しい言い方を教えてくれる。そんなとき、みんなが楽しそうに和やかな雰囲気になるから、「笑わせた」のでも「笑われた」のでも、大人たちを沸かせた子どものように、私はなんとなく幸せな気持ちになる。みんなに愛されているという感覚の中で、私の言語能力は育っていった。

日中韓の異同について語れるようになった今では、かつてイギリスにいたときのように中国人や韓国人の存在が日本人としての私のアイデンティティを脅かすことはない。いつか日本語教師としてイギリスに行き、日本とともに韓国や中国についても紹介したい。そして、幼い頃の自分と深い対話がしたい。

下は、中国にいた2012年に私が書いた詩である。中国語でクリスマス・イブを「平安夜」と言い、「りんご」を意味する「苹果」の発音が似ているため、中国ではクリスマス・イブにりんごを贈り合う習慣がある。生徒にもらったりりんごを眺めているとふと創作意欲が湧いてきて、デッサンをした。するとさらにそれに詩を付けたくなった。詩は中国語で書いた。こ

ここでは、原文の下に日本語訳を付ける。移動しながらことばを学び、私の世界が広がっていくことが表現されている。

我初次见面时候 它还没有名字，
我一岁的时候 它有了叫りんご这个名字，
我六岁的时候 它有了叫apple这个名字，
我二十五岁的时候 它有了叫사과这个名字，
最近它有了叫苹果这个名字。
它是一条天真的光线，
妈妈给我的甜蜜的回忆，
提醒我罪恶的果实，
陪我道歉的小道具，
而现在它给我带来平安。

私が初めて会ったとき それはまだ名前がなかった。
私が一歳のとき それはりんごという名前をもった。
私が六歳のとき それはappleという名前をもった。
私が二十五歳のとき それは사과という名前をもった。
最近それは苹果という名前をもった。
それは一筋の純真な光，
母がくれた甘い記憶，
罪悪を教える果实，
謝罪に付き添ってくれる小道具¹，
そして今それは私に平安をもたらす。

文献

川上郁雄 (2011). 『「移動する子どもたち」の考える力とリテラシー——主体性の年少者日本語教育』 明石書店.

田中克彦 (1981). 『ことばと国家』 岩波新書.

¹ 韓国語で「りんご」は「謝罪」と同音異義語であるため、謝るときにりんごを贈ることがある。